

HITOKOMART

No.17

篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

古い町並みを歩いていると時折小さな鳥居を住宅の塀や壁に見つけることがある。関西の人間には昔から馴染みの立ち小便をさせないためのおまじないだが関東では殆ど知られていない。

京都の伏見稲荷神社の赤い鳥居の風景は外国人観光客にとっては日本らしい風景の定番だが、京都の街中に今でも時折見かけるこの小さな鳥居の意味はガイドブックには多分載っていないだろうな。



若い頃、大阪天王寺の駅ビルの大きな階段を上がっていて前を歩いている女性のミニスカートの目があった事があった。その瞬間、誰かに頭をイヤと言うほど殴られた。と反射的にそう思ったのだが本当は階段の壁面にあった広告の出っ張り部分にぶつかったのだった。

暑さと恥ずかしさで顔に汗が滴って来た。拭った手を見ると血だった。頭頂部が切れて血が出ていたのだ。慌ててトイレの鏡の前で応急処置をして、家に着くまでずっと頭を押さえながら帰ったのを覚えている。

男の悲しい性（さが）ゆえの何とも恥ずかしい若い日の思い出である。



ジャンプ！

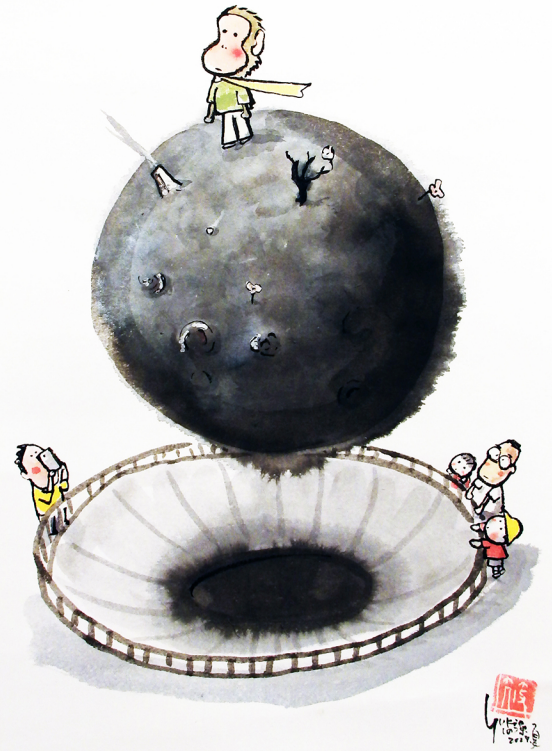
猿の惑星

京都市動物園は精華大学のカートウーンコースの1年生にとっては動物クロッキー800枚を仕上げるという夏休みの課題に取り組むハードトレーニングの場所である。

動物園の目玉はゴリラの生熊がうかがえるゴリラ舎なのだが、私は園の中心部にある猿島が好きだった。周りを取り囲む円形の塀の上から猿たちの動きを眺めていると、それぞれの行動に見入ってしまい、時間を忘れたものである。

そんな場所も残念ながら一昨年の11月末に85年の歴史を閉じ、サルたちはそこに接する類人猿舎に移されてしまった。

今は分けられたそれぞれの狭い空間の中でどんな事を思っているのだろう。



今、絵を描く時にこんな風にしてモチーフのサイズを測ったりすることはボクには無い。漫画表現においては形を正確に写し取るという事は大して重要な問題ではないからだ。しかし美大受験生時代の石膏デッサン修行はそうではなかった。それは正確に目の前の石膏像を

修行

画紙に写し取るための必須作業だったからである。この時、対象物に対して腕はまっすぐに伸びていなければ測定に誤差がでくる。そういう意味では漫画も描き手の想いがまっすぐであることが重要だと言える。

昔は誰もが必ず車の中に入れていた道路地図帳を見ることがなくなつた。
最初の頃は正確さに不安のあったカーナビも近年は飛躍的に能力が向上し、今はスマホがあれば人も車もどこにでも行ける時代となった。

しかしこれは同時に自分の位置情報も第三者に把握されることであり、それがさまざまな事象の分析にも使われている。
西遊記で孫悟空がお釈迦様の指に落書きをしてしまう下りは一人の人間の見ている世界が如何に小さな世界であるかを見せる

場面だが、『手のひらで転がされる』という言い方があるが今なら『スマホの上で転がされている』時代だと言えるだろう。

到達ポイント



少年期

永島慎二さんの本に『少年期』というのがある。私はこの本の描く世界が大好きである。いつも幼い頃の想い出と繋がって来て、懐かしく切なく、温かい映像が頭の中に広がって来る。そして自分もそんな時代の絵を描いてみたくなるのである。



水 影



脱 皮